

[論文]

痛みへの眼差しから共感へ

—ローラ・ファーガソンの描く身体を事例として—

田中みわ子（筑波大学外国語センター特任研究員）

抄録

本稿は、ニューヨークの画家であるローラ・ファーガソン (Laura Ferguson) の Visible Skeleton Series(1994-2004) を事例として取り上げ、そこに描き出された痛みへの眼差しについて考察する。このシリーズには、脊椎側弯症により脊椎に歪みがあるファーガソン自身の身体が、X線写真に基づいて描き出されている。このようなファーガソンの作品は、自らの美と痛みの感覚を視覚化する試みである。本稿は、アメリカの医師であり哲学者であるドルー・リーダーの「デイス＝アピアランス (dys-appearance)」の概念を援用することによって、ファーガソンが描き出した「痛みの二重性」と痛みに対する2つの眼差し—ソクラテス的な一人称のパースペクティヴとデカルト的な三人称のパースペクティヴ—を提示する。この2つの眼差しが闘ぎ合う場に、ファーガソンは痛みを他者との関係性として描き出している。そして、ファーガソンと鑑賞者の眼差しが重なり合うところに、アートを介した痛みへの共感可能性を見出すことができる。

Key Word

痛み、眼差し、デイス＝アピアランス、共感

1. はじめに

アメリカのニューヨークの画家であるローラ・ファーガソン (Laura Ferguson, 1947-) の Visible Skeleton Series (1994-2004) に描かれた身体は、骨格が露わになり歪んでいる。ファーガソンが描き出しているのは、日常においては隠れて／隠されているもの—身体の内部、骨、痛みの感覚—であり、身体の脆弱性である。痛みは、多くの画家や作家たちによって取り上げられてきたテーマであり、様々なかたちで描き出されてきた¹⁾。そのような系譜の中で、ファーガソンは、自らの痛みを独自の仕方で表現する画家の一人として位置づけられる。そこで本稿では、ファーガソンが自らの痛みをどのように捉え、他者との関係をどのように見出しているのかをみていくことによって、痛みへの眼差しを描き出し、そこに痛みの共有不可能性と、それでもなおその場に生起する「共感」について考察していく。

本稿は、ファーガソンの作品を媒介とした身体的な相互作用の場を、ケアの現場として追究しようとする試みである。ケアの現場という言葉は、一般的には、医療、看護、福祉の現場や、医療施設や福祉施設の空間を意味するものである。そうした現場におけるケアする人／される人の関係性や、アートのもつ意義や役割については、アートミーツケア学会をはじめとして様々な実践や論考が重ねられてきている。そうした状況のなかであって、

本稿は、絵画作品に描き出された痛みが鑑賞者の共感を生起させる場を、ケアの現場として光を当ててみるものである。このことは、配慮や気遣いなど、身体的な相互作用の営みとしてケアを捉える取り組みに対して、絵画作品を媒介とした身体的な相互作用の場をケアの現場として位置づけ、そうしたケアの観点から絵画作品を論じるひとつの試みでもある。とりわけ本稿では、ファーガソンが描き出した痛みへの「眼差し」から「共感」へと至る、その過程を論じていくことにする。

考察にあたり、まず Visible Skeleton Series の作品をめぐる状況を述べながら、ファーガソンが自らの痛みをどのように視覚化しているのかをみていく（第2節）。次に、アメリカの医師であり哲学者であるドルー・リーダー（Drew Leder）の「ディス＝アピアランス（dys-appearance）」の概念を手がかりに、ファーガソンが描き出した「痛みの二重性」と、痛みへの2つの眼差しを提示する（第3節）。そして、この2つの眼差しが闘ぎ合う場に、ファーガソンが他者との関係性をどのように見出しているのかを論じ（第4節）、最後に、鑑賞者との間に生起する「共感」に、ケアの現場への示唆を得ることにしたい（第5節）。

2. 痛みを描くーローラ・ファーガソンの Visible Skeleton Series

Visible Skeleton Series は、ファーガソンが主に1994年から2004年に制作した一連の作品群である。このシリーズには、脊椎側弯症により、胸郭を圧迫し呼吸を困難にする脊椎の歪みがあるファーガソン自身の身体が、X線写真に基づいて描き出されている。



図 1. Laura Ferguson, Crouching Figure with Visible Skeleton (2000) .

紙に油絵具、ブロンズ粉、木炭、パステル鉛筆、油性クレヨン、33.0cm × 25.4cm、Memphis: Medtronic Sofamar Danek 所蔵 .

www.lauraferguson.net

©2013 by Laura Ferguson

図1 《目に見える骨格をもったうずくまる姿》を見てみよう。この作品は、ファーガソンが後ろ向きに座る姿が描き出され、歪んだ骨が露わになっている。自らの生体構造（anatomy）を描くために、ファーガソンは油絵の具とブロンズ粉を混ぜて紙の上に浮かべ、それを何度も繰り返すことによって重層的な表面を作り出している。この表面に、木炭、色鉛筆、パステル、油性のクレヨンを用いて描画を加える。この技法はファーガソン自身が生み出した独自のものであり、実際の皮膚や血管の色合いを帯びている [Ferguson 2004 : 165]。

このようにしてファーガソンは、X線写真のイメージに、自らの生体構造の美しさを見出し、彼女自身が感じるその複雑で繊細な美を描き出している [Ferguson 2004]。それは、医学的に正確でありつつも、非人格化され無機質なものとなった白黒のX線写真とは異なり、ファーガソン自身の経験を織り込み、それ自体「生きていて、感覚的」なものとなっている [Beckwith 2004 : 175]。ファーガソンによって描かれた骨は、彼女の個人史をも帯びて、痛みを喚起すると同時に、痛みの記憶を留めてもいる。そのようにしてファーガソンは、自分自身の感じる美の中に、痛みの感覚をも描き出すのである。

このようなファーガソンの作品は、様々な障害や痛みを抱える人々だけでなく、医療関係者たちの関心をも惹きつけてきた。ファーガソンの描いた作品は、医療的なイメージと美のイメージに対する新たなアプローチであり [Kevles 1997 : 273]、「自己表現の試みにおいて、医学とアートを絡みあわせた」 [Samartzis and Arnold 2008 : 1045] と評されてもいる。たとえば、病理学者の J. ブルース・ベックウィズは「彼女の驚嘆すべき肖像画は、分析的な生体構造の伝統的に冷たい科学に生命と感情を持ち込んでいる。」 [Beckwith 2004 : 174] と述べている。医療関係者たちからしばしば称賛の声が寄せられる事態を指して、障害学研究者の A. D. ドレガーは、医学界が患者の声に耳を傾けるようになった「希望の持てるサイン」だと指摘している [Dreger 2004=2004 : 129-130=197]。

ドレガーは、ファーガソンが痛みを描いていることに言及して、Visible Skeleton Series の作品が、「鳴り響く痛み、あるいは空気のような優美さ」を示唆しており、「骨に声を与える」ものだと述べている [Dreger 2004 : 161]。ドレガーが指摘しているように、ファーガソンの骨は、「彼女の身体の表面に現われている」、「普通は目に見えない、あるレベルでは、言葉で言い表せないもの」 [ibid.] であり、ファーガソンはその骨に「声」を与えているというのである。その「声」は「繊細な美」と同時に、歪んだ物質性の激しい痛みを語る「声」である。医学雑誌にファーガソンの作品を紹介しているサマーチスとアーノルドもまた、ファーガソンの「脊椎は声の導管」 [Samartzis and Arnold 2008 : 1046] であると言い表し、骨が痛みという声を発していることに言及している。

ファーガソンが描き出している痛みの声は、言語にも音声にもならない、声なき声である。痛みは、先にドレガーが述べたように「言葉では言い表せない」、言葉にならないものであり、言語化を拒むものである。だからこそ、痛みについて論じた E. スキャリーは、「痛みは声をもたない」 [Scarry 1985 : 3] と述べたのであろう。それは他者にとっては聞こえないものとして受け取られる。痛みを感じる本人にとっても言語化不可能であることが、他者には痛みの声を聞こえなくするのである。

ファーガソンは、スキャリーの著作から多くのインスピレーションを受けている²⁾。ファーガソンは、スキャリーが述べる拷問や戦争の痛みとファーガソン自身の肉体的な痛みの質やその規模の違いについて認めながら、痛みが言語化不可能なものであるというスキャリーの考え方には同意できないとの態度を示し、痛みは「『声をもたない』、語られ得ない」のではなく、「それは難しいけれど、可能だ。〔中略〕私自身の痛みの経験について語る言葉を一生懸命探している」と述べている [Ferguson unpublished : 220]。

ファーガソンは自らの痛みを「他の内的身体の感情よりも雄弁なものである」 [ibid.] と述べて、非言語的な経験である痛みを言語化／視覚化することを試みている。そのような痛みの声は、言語化されることから零れ落ちてしまいながらも、最も雄弁に語る声なの

である³⁾。その声は、その痛みの中にある人にとっては常に聞こえているものである。ファーガソンの場合、彼女の口からではなく骨から発するその声は、骨を通じて彼女の全身に鳴り響いている。その声を何とか言葉にすること、誰かに声として語ることによって、痛みは他者へと向けられる。けれども、「痛みが声をもたない」とされたときには、その声が聞き届けられなかったことを意味するのである。痛みが言語化不可能であるのは、言語が痛みを取り逃がしてしまうからなのである。

痛みの声は、誰かに聞きとめられなければ容易に人を孤立させる。ファーガソンにとって痛みを言語化／視覚化することは、他者へと繋がる回路のようなものであり、だからこそ重要なものである⁴⁾。ファーガソンと同様に、ディスアビリティ・アートの実践者であり障害学研究者でもあるP. キュッパースもまた、ディスアビリティ・アートにおいて痛みが雄弁な性質をもち、他者と繋ぐ回路となることを、実践に基づきながら論じている [Kuppers 2007 : 74 ; 2009 : 227]。キュッパースが指摘しているように、確かに「痛みの中にある人間の身体は、画家や写真家の好む題材だ」 [Kuppers 2007 : 74] と考えられ、痛みの表現は多くの言説や実践において取り上げられ「響応する (communicative) 力に満ちた」 [ibid.] ものものである⁵⁾。痛みがそれ自体表出的で響応する力をもつということは、痛みの表象が時代や文化を超えて遍在することを裏づけてもいる。だが、キュッパースが焦点を当てるのは、「痛みの遍在の別の側面」、すなわち「痛みの響応不可能性 (incommunicability)」であり、「コミュニケーションや意味をどういうわけか逃れ、言説や実践を繰り返し刺激する痛みの中心の不透明性」 [ibid. : 75] である。これは、痛みが絶対的にその身体においてのみ経験されるものであり、他の身体が代わりに引き受けることもできないことによる⁶⁾。痛みは、一方では響応する力を発しながらも、他方で言語や意味からもすり抜けて、他の身体と共有する世界を崩壊させるものとも捉えられるのである。

ファーガソンの骨が発する痛みの声もまた、響応する力をもち、触発的なものでもある。けれども同時に、痛みの言語化不可能性や響応不可能性は、絶対的な孤立をもたらすものである [Leder 1990]。ファーガソンが痛みの「他の人との絶対的分裂」 [ibid.] の中にあって、他者と繋がる回路をどのように見出しているのか、ファーガソンの痛みへの眼差しに迫ってみよう。

3. 痛みの二重性と「ディス = アピアランス」

前節では、ファーガソンの描き出した身体の骨に痛みの声をみてきた。本節では、ファーガソンの描いた身体を、彼女の痛みの経験の現れ (ディス = アピアランス) と捉え、痛みへの眼差しをみていくことにする。

ファーガソンは、「痛みはそれ自体の二重性をもつ。すなわち私の一部であるが、有害で異質な存在のようである。〔中略〕痛みは自己の内部に他なるものを創造する」 [Ferguson unpublished : 148] と述べている。ファーガソンはまた次のようにも言う。

多くの仕方で、痛みは究極の内的身体の感情、つまり最も強度がありおそらく最も共有できないものを表している。痛みは、私たちが最も基本的な実存レベルにおいて自己 - 他者の二重性に

直面させる [ibid. : 132]。

こうした言葉が示しているように、ファーガソンは、自らの痛みを、それ自体が自己 - 他者の二重性をもち、自己の内部に「他なるもの」を創造するものと捉えている。

このような痛みの二重性に、ドルー・リーダーの「デイス = アピアランス」(dys-appearance) をみることができよう⁷⁾。「デイス = アピアランス」とは、身体に痛みや何らかの機能不全が生じたときに、普段は意識から消失し、無意識の中に沈む身体が意図せずして意識に立ち現れる身体現象のことである(たとえば、痛み、疲れ、緊張、飢えや喉の乾きなどによって、身体そのものあるいはその一部が意識されてしまうといったような場合を思い起こしてほしい)。リーダーによれば、「痛みにおいて身体ないし身体の一部は異質な存在(alien presence)として出現する」のであり、「痛みのある身体は自己とは何か異なるものとしてしばしば経験される」[Leder 1990 : 76]。リーダーは、このようなかたちで身体が主題化されて意識に現れる様態を「デイス = アピアランス」と呼び、痛みが身体のデイス = アピアランスを引き起こすことを論じている [ibid. : 86]⁸⁾。リーダーは痛みを現象学の文脈において論じているのであるが、痛みが重要であるのも、このように痛みが「我々の生きられた空間や時間、我々の、他者や自分自身との関係を再組織化」するからである。

さらにリーダーによれば、X線は「デイス = アピアランスの力を構成する」[ibid. : 144] ものである。ここで、デイス = アピアランスの力とは、(「他なるもの」が自らの内部において「離れて」現れることによって) 自分自身の身体との出会いをもたらす力を意味すると考えられる。X線によって骨を視覚的に捉えること、そして内部感覚として感覚することは、自らの身体の内部に生じる骨の現われ(デイス = アピアランス) となるからである。リーダーはX線に言及しながら、デイス = アピアランスの力を、身体と「死」(あるいは「死—の中にある一体」としての「死体」) との関係として描き出している。

私自身の死体は予測的な仕方では経験され、私の生きている身体の内部に暗黙に宿っている。疲労は私の四肢の本当の重さを思い起こさせ、X線は私の目に骨格を明らかにし、事故は私の激しい脆弱性を想起させ、老いの中に私は能力やスキルの喪失を感じる。こうした死を思い起こさせるもの(reminders of death) は、デイス = アピアランスの力を構成しており、私に己の身体化した状態を呼び起こす。死体はいつも内側から迫っている [ibid.]。

「死」あるいは「死体」は自らが経験できないもの、自らが接近できないものである。リーダーの言葉を引用すれば「死体は〔中略〕絶えず接近している未来であり、遠ざかることなく、『私』が到達できない必然的な終焉である」[ibid.:145]。生きている身体の内部には、「死を思い起こさせるもの」が「暗黙に宿っており」、その極限として「死/死体」はある。X線写真は、そのような自らの身体の内部にある「死を思い起こさせるもの」なのである。身体には、この「死/死体」が「いつも内側から迫っている」。

この「死/死体」が常に切迫している事態について、リーダーは、対照的な2つのパースペクティヴをソクラテスとデカルトに見出している。

デカルトにとって、解剖の対象としての死体こそが、科学的知識の鍵を提供するものである。すなわち、ソクラテスが彼自身の身体に先取りの形態で言及しているのに対して、デカルトは他者の現実化された死体を論じるのである。

このパースペクティヴの移行において、デカルトが影響を与えた近代の変質への手掛かりが見出される身体は、古代から現在に至るまで、しばしば病氣、衰え、死に関連してきた。しかし、ギリシャ人や中世の人々にとって、それは主に一人称のパースペクティヴからはっきりと述べられる事柄であった。その人自身の死する存在としての有限性と共に実存的な先取りがあった。問題なのは主体の死である。〔中略〕しかし、この一人称の脅威を克服するためのデカルトの戦略は、まさに身体を完全に三人称において捉えることである。他者の身体こそ、デカルトが解剖したものであり、彼自身の身体はそこからそのようなモデルに再構成された [ibid. : 145] ⁹⁾。

ここでリーダーが論じているのは、近代以降のデカルト的な心身二元論に基づく身体と、身体に対するそれ以前のパースペクティヴの違いである。リーダーはソクラテスを取り上げながら、古代ギリシャ人や中世の人々にとって、病氣、老い、死などは、「主に一人称のパースペクティヴからはっきりと述べられる事柄であった」 [ibid.] と述べている。ソクラテスは、一人称の視点つまり「彼自身の身体」において「自らの死体」を捉えていたが、デカルトは、三人称の視点から、つまり「他者の現実化された死体」として「自らの身体」を捉えていた。死／死体は自らの身体において常に切迫しているのだが、「この一人称の脅威を克服するため」にこそ、デカルトは身体を解剖される他者の死体として描き出したのだとリーダーはいうのである。デカルトにおいて彼自身の身体とは、あくまでも三人称のパースペクティヴにおいて解剖されたモデルから再構成されたものである [ibid.]。

この2つの対照的なパースペクティヴは、デイス＝アピアランスにおける身体への2つの接近の仕方を示唆してくれよう。リーダーを援用しながら前出のキュッパースは、X線がもたらすこのような身体的な出会いについて、カナダのウェブデザイナーのスーザン・ハーマン (Susan Harman) による3人の線維筋肉痛の女性の文章、イメージ、パフォーマンスを素材としたインスタレーションを事例に考察している。キュッパースは、X線写真のイメージを用いたウェブ上のパフォーマンスが、通常の白黒ではなく「暴力的な黄色と青」で描かれているところに、「暴力と怒り」を感じとっている。リーダーがX線を「死を思い起こさせるもの」だと論じたことを踏まえて、キュッパースは、X線写真の骨格のように「医療的なものを知覚するばらばらな身体のイメージ」は、「生の一時的な性質」に触れるのだという。そして、このような視覚的な出会いを、「生における死の現れ出る感覚との対話」だと論じている [Kuppers 2003:119]。X線写真に映し出された骨格は、それ自体、死の現れ出る感覚を引き起こし、死／死体との対話を引き起こしうるのだといえよう。この対話は、X線写真が単にデカルト的な他者の、三人称の身体ではなく、まさにソクラテス的な一人称の身体として、自分自身の身体と出会うということを示している。

ファーガソンの場合も同様に、自分自身の骨の現れは、X線という医学的な眼差しを織り込み、拡張しつつ、「生における死の現れ出る感覚の対話」として、一人称の眼差しにおいて捉えられているとみることができよう。そのことは、彼女の骨が個人史を帯びたものとして、そして痛みという声を発するものとして、描き出されていることにも見て取れる。ファーガソンは、まさに一人称のパースペクティヴにおいて、骨と痛みの感覚 (デ

イス＝アピアランス)を視覚的なイメージに置き換えているのである。表面化して描き出された骨は、ファーガソンの身体において現に生じている骨と痛みの感覚とそのデイス＝アピアランスそのものである。ファーガソンにとって骨は、内部感覚において意識から消失し、無意識の内に沈んでいるものではなく、常に痛みの声の在り処でもある。今や、X線写真の自らの骨格を見ることによって拡張したファーガソンの眼差しは、骨を対象化して見るのではなく、骨の中に潜り込み、自分自身と出会っている。ファーガソンの作品に「緊張や対立」が走り、医師たちをも魅了した理由のひとつは、骨と痛みの感覚（デイス＝アピアランス）に、一人称と三人称のパースペクティヴから捉えられた骨のイメージが闘ぎ合い、そこに身体的な出会いがあるからであろう。

繰り返して言えば、自分自身の身体との出会いは、自らの内において離れたものとして、「他なるもの」として切迫してくるものから導かれる。作品に描かれた骨は、痛みが創り出す「他なるもの」の視覚的なイメージである。リーダーやキュッパースは、この「他なるもの」の創出を、死の現れやその現れの感覚の対話にみている。この対話の極限には、自らの死との関係があった。けれども、ファーガソンにおいては、この対話が「他なるもの」と「触れること」へと繋がっていること、そして、その「他なるもの」との出会いが、自己 - 他者の二重性として、他者との関係性として描き出されていることを次にみていく。

4. 他なるものとの接触—透明な皮膚

ファーガソンは、自らの骨と痛みの感覚およびその現れを描いていると考えられたが、それは、図1に描かれているファーガソンの身体の「透明な皮膚」にみることができよう。これを前出のベックウィズは、「透明な女性のテクニク」[Beckwith 2004: 175]と呼んでいる。このテクニクが、「痛みを伝えるための」テクニクであることに言及し、ベックウィズは、次のように述べている。

ファーガソンのイメージの多くにおいて、彼女の骨格は皮膚の窓を通して剥き出しになっており、表面の組織は透明になっている。透明なローラは、固く執念深く歪んでいる骨と、敏感で感覚的な柔らかさが衝突してかたちづくられた混合体として露呈している。このテクニクは、私がこれまで見てきたものよりもさらに効果的に、骨の硬さと覆っている組織の精巧さとの間のコントラストを伝えている。テクスチャ（質感）の中のこのコントラスト、つまりより硬い構造とより柔らかい構造の摩擦こそ、患者たち、とりわけ整形外科の問題をもつ患者たちが経験する多くの痛みの究極的な原因である [ibid.: 174-175]。

ベックウィズの言葉を繰り返せば、「透明なローラ」は、「硬く執念深く歪んでいる骨と、敏感で感覚的な柔らかさが衝突してかたちづくられた混合体として露呈している」。この透明な皮膚を通して見ることのできる「骨の硬さと覆っている組織の精巧さとの間のコントラスト」こそ、整形外科の専門家の目には「痛みの究極的な原因」と映るのであり、その痛みをファーガソンは描き出しているのである。

ファーガソンは皮膚について、「皮膚は自己と外的世界の境界である。外部環境と内部環境の双方と接している緩衝地帯である」[Ferguson unpublished: 222]と述べている。

この言葉を踏まえるならば、透明な皮膚は、「自己と外的環境の境界」があいまいになり、もはや「外部環境と内部環境」との境目すらもないことを示すものとなる。ファーガソンはさらに、「身体は自己と他者の媒介者、意識と物質世界の媒介者」[ibid.]であると述べていることから、皮膚が透明となった身体は、自／他ないし内／外の双方が区別されない、あるいは双方に触れている場であることが理解されよう。その身体を覆う皮膚が透明になり骨が表面化していることは、骨と痛みのデイス＝アピアランスを視覚化しているばかりか、自己と他者、あるいは内部と外部とを隔てる境界が揺らいでいることをも示唆しているのである。先ほどのベックウィズが描かれた骨に痛みを捉えたように、身体が媒介するものを痛みがすべて突き通してしまっているようにも思われる。

リーダーが通常の自己 - 他者関係の分断であり崩壊であると捉えた痛みの真只中において、ファーガソンは、痛みを自己 - 他者の二重性として捉えていた。ファーガソンの透明な皮膚は、「骨と痛みの感覚」から生じるデイス＝アピアランスという「他なるもの」に触れて、自らの境界をも他なるものとの接触の中に置き入れている。自己と他者関係を分断する痛みは、しかし、その痛みの只中において他者と結びつけているのである。もちろんリーダーは、「デイス＝アピアランスは『他者』としての身体の現われ」[Leder 1990: 137] であるとも述べている。世界の崩壊をもたらそうとするのは、デイス＝アピアランスであるが、このデイス＝アピアランスによってこそ世界への接触がもたらされるのである。ここでデイス＝アピアランスは、その内なる切迫に対して身体を受動的なものとするのだが、逆説的なことに、自らに閉じていくのではなく、自己の中の他なるものに開かれていく身体そのものなのである。

興味深いことにファーガソンは、図2に示されているように、痛みが創出する他なるものに「人格 persona」を与えている。ファーガソンが創造したこの人格は、ファーガソンにとって「恋人のような存在」であるという [Ferguson unpublished: 152]¹⁰⁾。図2《目に見える骨格と立っている恋人》は後ろ向きに立っているファーガソンの腰に恋人の左手が触れている作品である。この作品には、痛みが、他者として、彼女の恋人として描かれている¹¹⁾。



図 2. Laura Ferguson, Standing Couple with Visible Skeleton (1996).

紙に油絵具、ブロンズ粉、木炭、パステル鉛筆、油性クレヨン、
33.0cm × 28.0cm、個人蔵

www.lauraferguson.net

©2013 by Laura Ferguson

この痛みという人格は、ファーガソンの恋人がそうであるように男性の側面をもつが、その姿は「赤く覆われており」「男性性と女性性の二重のイメージ」で捉えられ、描かれている [ibid.]。ファーガソンに触れているその痛みの手、恋人の手を見てみると、その手はタイトルを知らなければ、誰の手なのかは判別が付きにくい。この手と骨が、皮膚によって隔てられずに、ほぼ同一の平面において彼女の身体に触れていることに注目してみると、彼女の経験において、手が触れることと骨が触れることが、同じように「触れられている」ことであると分かる。この意味で、他者、とりわけ恋人に触れられることは、痛みに触れることと同じなのである。痛みの最中であって他なるものに触れることは、ファーガソンにとって他者との出会いであり、恋人の抱擁、痛みの抱擁となっている。

それゆえ、他者に触れられていることを描くことは、ファーガソン自身の言葉が示しているように「異なっているということがもたらしうる孤立感を超える方法」[Ferguson unpublished: 132]なのである。私の内部にありつつ私から離れている痛み、そして自己-他者の二重性のその距離に、骨に触れ、他者に触れ、外部世界に触れることの同時性と、自らの身体の痛みに触れつつ触れられ、他者の身体に触れつつ触れられる経験の重なりがここにみられる。その経験の重なりを、ファーガソンは恋人の抱擁として描いたのであり、痛みがもたらす孤立感を超える方法となるのである。この経験の重なりが、他者との関係性へと、もっといえば鑑賞者の身体へと広がっていく。

図1を再度見てみよう。この時、鑑賞者の眼差しは、ファーガソンの描いた身体を背後から見つめるのだが、その眼差しは、痛みの二重性の中に身を置きながら自らの身体を感じ、見つめ、痛みを描き出すファーガソンの眼差しと重なるのではないだろうか。ファーガソン自身もまた自分の背中を後ろから見つめている。ファーガソンは、鑑賞者の眼差しが、彼女の眼差しと出会うのではなく、眼差しを重ねること、そして内部からの「他なるもの」の切迫を、鑑賞者の眼差しの対象とするのではなく、その切迫に寄り添うことを求めているように思われる。ファーガソンの眼差しは、既にX線写真の眼差しを含み込み、拡張されていたが、その拡張された眼差しは、鑑賞者の眼差しをも同様に拡張するのである。鑑賞者の眼差しは、ファーガソンの背中を背後から見つめ、彼女の痛み、すなわち「他なるもの」の現れに直面し、ファーガソンの眼差しに重なり合う。このとき鑑賞者との間にどのような相互作用の場が生じているのかを、次に考察していく。

5. 眼差しを重ねる—痛みの共同性

ファーガソンの描いた身体は、鑑賞者との間にひとつの共有される場、いわば〈間身体的な場〉を創り出している。ファーガソンの眼差しと鑑賞者の眼差しは、互いに補い合い、その描かれた身体が表現する世界を共有しようとする。ファーガソンの描いた身体は、ファーガソン自身でさえ「見る」ことのできないものであり、鑑賞者もまた自分の背中や骨を「見る」ことはできない。そのような自分自身には見えない身体が、今や鑑賞者の眼差しの前に立ち現れている。そうした身体の現れは、見えないはずの背中や骨を見る経験をもたらす。鑑賞者は、その描かれた骨や、ファーガソンを抱擁する手(図2)を自らの内に認め、ファーガソンの描かれた身体において自らの身体と出会うのだ。ファーガソンと眼差しを重ね合わせる鑑賞者の眼差しは、このようなかたちで描かれた身体を媒介として

〈間身体的な場〉を開くのである。

けれどもこの〈間身体的な場〉は、痛みという身体の脆弱性によって「裂け目」を生じることにもなりかねない。身体の脆弱性 (vulnerability) とは、身体が傷つきやすいことを、痛みや苦痛を有することを指している。痛みという身体の脆弱性は、それが「もう一人には共有されない内部性によって特徴づけられる」[Leder 1990:74] ことから、人々の〈間身体的な場〉に分断、裂け目をもたらす契機ともなる。ファーガソンが提示している骨はまた、X線写真のイメージであり、鑑賞者はファーガソンの内部における「他なるもの」の出現とその切迫に直面する。その「他なるもの」の切迫が、鑑賞者自身の眼差しを「凍らせる」。そのとき、描かれている骨に、ファーガソンと鑑賞者が共に「他なるもの」に触れるのだ。ファーガソンが描いた骨と痛みが反応を引き起こすのであり、鑑賞者の内部感覚において「他なるもの」の現れが、ファーガソンと鑑賞者の〈間身体的な場〉の裂け目となり、鑑賞者の内に「他なるもの」との出会いをもたらすのである。(その出会いは、前述したことを思い起こせば、一人称において把握されるソクラテス的身体であるといえよう)。だが、自らの内において出会う「他なるもの」を、ファーガソンという他者の身体として客観化してしまうことも起こりうる(この場合、「他なるもの」との出会いは、三人称として把握されるデカルト的身体といえる)。自らの内に生じる「根源的な分裂」は、対象化された「他者」によって埋め合わせられてしまうのだ。結果として、〈間身体的な場〉の分断をもたらすのは、孤独や孤立感となる。

おそらくファーガソンは、このような〈間身体的な場〉の分断を、日常的に経験してきたと思われる。けれども一方で、人々はそれでも痛みや苦痛に対して「共感」することができる。〈間身体的な場〉が裂け目によって分断されるその絶対的な孤立の中で、身体の脆弱性が共感を生み出すこと—それを「痛みの共同性」と呼び、身体の脆弱性と「痛みの共同性」について最後に考察することにした。

社会学者のB.S. ターナーは、痛みや苦しみが身体の脆弱性を明らかに示すものであり、人間の苦痛、とりわけ痛みの普遍性が、他者への「共感」ひいては「共同性・共同体」をも可能にするのだと論じている [Turner 2001:22; 後藤 2007:196]。ターナーによれば、「苦しみ／痛みの否定的な知覚によって決定される感覚の共同体の存在」 [Turner 2001:22] があり、それは、世代や文化を超えた人間の結びつき、さらには、普遍的な「人権」へと繋がるものである。痛みや苦痛という身体の脆弱性は、たとえ文化や社会によって異なるものであるとしても、人権や社会制度を支える土台なのである。なぜなら、ターナーにとって、人間は仲間の人間存在に対して共感することができること、(その脆弱性のもう一つの特徴である) 苦しむことができるということは、道徳的共同体の一員には重要な特徴だからである [ibid.:18]。言い換えれば、身体の脆弱性は、それ自体普遍的なものであり、人々の間に共感と共感に基づく共同体・共同性を可能とするものである。人が同じく苦痛を経験することや、そのことによる「共感」は、身体を基盤とした普遍性を持つものであり、ターナーはそれを「人権」を基礎づけるものとして重要視する。

ターナーは身体の脆弱性に基づく「感覚の共同体」において、普遍的な「人権」を見出しているのだが、ファーガソンはまた別の見方を提示しているように思われる。ファーガソンは、「私たちが自分自身の痛みの経験を他者の皮膚の内側に入り込むために用いるとき、痛みは共感と人間の繋がり深い根源になりうる」 [Ferguson unpublished:205] と

述べている。ファーガソンは痛みがもたらす共感に、個別的な「人権」ではなく、「人間の繋がり」の深い根源——まさに「ケア」といえよう——をみているのである。そのことは、ファーガソンの次のような言葉にも明確に表れている。

痛み—とりわけ他者の痛み—が生じさせる恐怖や罪という複雑な感情をやり過ごすことができるなら、経験のより深い層が目に見えるものとなり、私たちは本当の共感や人間関係が興りうる開かれた状態へと至るのだと思う [Ferguson 2004 : 168]。

ファーガソンの作品を媒介として生起する「共感」や「人々の繋がり」は、どのような関係性をもたらし、ケアの現場への示唆を与えてくれるのだろうか。

あらゆる身体がもつ痛みや苦痛が、人々の間に共感を生み出すとしても、ファーガソンは、「痛みはあたかも私たち一人一人だけに起こっているかのように感じられるので、私たちは他の人々から分離されていると感じる」と述べており、その実際の難しさや共感が届かない現実にもしばしば直面している [Ferguson unpublished : 132]。描かれた身体と鑑賞者の身体との間にある絶対的に共有不可能な痛み、互いの身体はむしろ遠ざかり、そして孤立感へと閉ざされてゆくこともある。鑑賞者は、恋人のように、そして彼女の痛みのように、ファーガソンに手を差し伸べ、触れることもできない。人々は他者の苦しみに無関心ではいられない一方で、他者の苦しみに共感することがむしろ不可能な現実をもつきつけられる。

そうした事態を脊椎の専門家であるデイヴィッド・ポリー医師が興味深いかたちで例証している。ポリー医師は、ファーガソンの描いた作品を見て、脊椎外科医の観点からファーガソンの背中に「目で手術」を試みる [Polly 2004 : 173]。ポリー医師は、「私が今できることの全ては彼らのために傷つき、彼らと共に傷つくことだ」と述べ、自分のこれまで診てきた患者のことを思い巡らせ、次のように言う。

私は2つの観点からこのことを考えていると気付いた。第一に、一人の人として、第二に、脊椎外科医としての観点だ。単なる一人の人としてファーガソンの作品を見ると、私は外的な美をみるが、内的な異常さや醜さもそこにはある。そのイメージは美しい表面と曲線と「正常さ」を描いているが、皮膚の透明さは表面下にある何か不吉なものを啓示している。この不吉なものは何か？それは単に異常さなのか醜さなのか、そしてその人全体を不吉で醜いものとする敷居に達するものなのか？そうではあるまいし、だからこそ私は考えさせられるのだ。このことは彼女の問題なのか、私の問題なのかと [Polly 2004 : 172-173]。

こうしたポリーの反応に対して、ファーガソンは次のように述べる。

しかし私は彼〔ポリー医師〕が私に手術をすることについて決断を下し注意深く計画していることに愕然とした。〔中略〕私は彼の「これみな全て私にとって意味がある」という思案のなかにエゴ、そして恩着せがましい態度さえもみた。彼の共感により哀れみのようだった。そしてちょうど自己憐憫が孤立と意味のない苦しみの閉じられた円環しかもたらさないように、私は哀れみが共感の妨げになると信じている。それは哀れむ人を苦しむ人から距離をとらせ、本当の人間の繋がりを

を妨げる。それは哀れむ人に苦しむ人とは別なのだと思うさせる防御のメカニズムだ。「これは私には起こり得ない」という言葉のように [Ferguson unpublished : 182-183]。

ポリー医師が想像上で手術を決断したことに、ファーガソンは深く傷つく。脊椎外科医としての判断であり、ファーガソンの痛みに共感を寄せていたとしても、ポリー医師の反応は、ファーガソンにとって「共感」ではなく、「哀れみ」として捉えられたのである。

けれどもファーガソンは、そうした現実を認めながらも、共感が必要であり、可能であると言う¹²⁾。そして、「他なる人の痛みへの共感は、痛みに動じない冷静な特質をもつ必要がある。苦しみは共有された。痛みを和らげようとする目的ではなく、ただ単に繋がりの中にあること一分離ではなく、見て、聞く状態にあること。」[Ferguson unpublished : 205] と述べているように、ファーガソンは、痛みや苦しみを「見て、聞く」他者の存在が、痛みの共同性を生み出すことを示唆している。

このような共同性は、哲学者のアルフォンソ・リングスや、医療社会学者のアーサー・フランクが描き出した共同性を想起させる。リングスは、「他者の異他的な苦しみは、視界に入る距離には展開せず、私の感受性を直接苦しめる」と述べて、「他者の苦しみを認識するのは、私の手、私の声、私の眼の中にある感受性である」と語っている。リングスは、他者の苦しみや脆弱性に対面する人のいわば受動的に衝き動かされた感受性に、「合理的共同体」とは別の「もう一つ別の共同体」が形づくられることを示唆している [Lingis 1994 = 2006 : 10, 30-31=27-28, 52-54]¹³⁾。フランクは、痛みや苦痛といった「苦しみ」が、「他のいかなる人物もその個人に変わって引き受けることができず」、それはただ「見過ごし難いもの」として目されるだけであることを指摘しつつも、他者へと「半ば開かれた」ものとなり、「響応する身体」となる可能性を見出している [Frank 1997=2002 : 177-178=242]。

リングスやフランクは、ターナーの述べた「感覚の共同体」を、共感不可能な現実にあっても、ただ手を差し伸べ、目撃し聞きとめるといった行為に、端的に言えば「共にあること」に見出している。だがそれだけでは、そこに共感は見出せない。ファーガソンは、共感を可能とするのは「想像力 (imagination)」[Ferguson unpublished : 205] であると述べている。「共にあること」の共同性が、ターナーのいう共感に基づく「感覚の共同体」へと至るには、想像力が求められるのである。

ファーガソンは、ポリー医師の想像力に期待を寄せていたと思われるのだが、ポリー医師との間に共感を実現されなかった。恐らくそれは、ポリー医師が、ファーガソンの身体を「私ではない」、「他者」と見做したことに起因すると考えられる。

イギリスの障害学研究者であり活動家でもあるトム・シェークスピアは、身体の脆弱性はあらゆる身体の普遍性であるにも関わらず、障害のある身体を障害のない身体とは異なる「他者」として表象することによってそうした普遍性を見えなくしたことを論じている [Shakespeare 1994]。このシェークスピアの議論を、身体社会学の研究者である後藤吉彦は「障害者の『他者化』」と呼び、それが「マジョリティの人々にとって一種の『天蓋』として機能している」[後藤 2007 : 201-202] と解釈している¹⁴⁾。シェークスピアや後藤が指摘しているように、先のポリー医師の身振りは、ファーガソンの身体の脆弱性を彼女にのみ見出し、身体の普遍性を挫折させているのである。ファーガソンは、「共にあること」

と、他者として「分離」することとの間の落差を、自らの表現を通して訴えている。だからこそ、ファーガソンの描いた痛みが想像力を介して共感を生むということに、他者と「共にある」ことの可能性を見出すことができる。そして、そのような共感を生み出し、痛み共同性を立ち上げていく情動的な働きかけとして、ケアを捉えることができるならば、絵画作品がもつケアの力は、ファーガソンの作品のように、ケアする人／される人という関係性を超えて、人と人との根源的な繋がりや相互関係性を双方にもたらすものと考えられる。

6. おわりに

本稿では、ファーガソンの Visible Skeleton Series に描かれた身体の痛み焦点を当て、そこに見られる身体的な経験と鑑賞者との相互作用を論じた。ファーガソンの描いた身体は、痛みという身体の脆弱性を露呈している。それが、鑑賞者との間に痛みの共同性と呼びうるものを生み出す過程を、痛みへの眼差しを分析することによって論じた。鑑賞者は、視覚的に捉える手前で、ファーガソンの骨と痛みのディス＝アピランスに触れ、普段は意識に現れない「他なるもの」の現れを経験する。そのときそこに〈間身体的な場〉の裂け目が生じる。痛みの共有不可能性や自他の絶対的な隔たりに身を引き裂かれてもなお、身体の脆弱性が想像力を介して共感を生むことを、ファーガソンは自らの作品と言葉で示している。本稿ではここにアートを紹介して「共にある」こと、すなわちケアへの可能性を見出してきた。

本稿は、ファーガソンの作品を媒介とした身体的な相互作用の場を、ケアの現場として追究してきた。その場は、直接的な出会いでなくても作品を介した身体的な出会いによって「共にある」ことを生起させ、痛みの共同性（ターナーのいう「感覚の共同体」）を呼び起こしていく。他者と共有することの不可能な痛みの感覚が、作品を媒介として共感を生む。そうした作品の力にこそ、人々の繋がりや関係性を生み出すケアの営みがあるとみることができる。骨や痛みの感覚は、それが「私」に生じながらも、「私ではない」ものを含んでいる。ファーガソンの描いた骨や痛みに触れることは、「私ではない」ものの境界の揺らぐ場に立つことなのである。そのような境界が揺らぐ場に身を置く実践的な営みとしてケアを位置づけることができるだろう。

ファーガソンは、自らの主観的な美や痛みの感覚を視覚的なイメージとして提示するのみならず、想像力を介して生まれる痛みへの共感が新たな身体への認識をもたらすことを希求していたと思われる。ファーガソンの作品は、ギャラリーや展覧会の常連客ではない人々、とくに障害や身体に問題を抱えている人々に見て欲しいと願って制作されたという [Ferguson 2003 : 30]。〈間身体的な場〉の裂け目において、ファーガソンの描いた身体に賛美の声が多く寄せられていることは、ファーガソンの作品がもつ力を示している。ファーガソンの作品を目の前にした鑑賞者は、作品が放つ美と痛みの感覚に眼差しを重ねつつ、共感可能性と不可能性との間を揺れ動くかもしれない。そのようなファーガソンの作品の力がどのようにケアの場へと広がっていくのか、そしてまた作品のみならず、作品を生み出していくプロセスにも視座を広げて、ケアする人／される人の関係性や身体への認識の変化がどのようにみられるのかを今後の課題として追究していきたい。

付記

本研究は JSPS 科研費 24720059 の助成を受けたものです。本研究に際し、ローラ・ファーガソン氏より資料の提供や作品掲載の許可をいただきました。記して感謝申し上げます。本稿は、2012年12月16日に愛媛大学で開催されたアートミーツケア学会での発表をもとに加筆修正したものです。会場で貴重な質問やコメントを下された方々に深く感謝申し上げます。

注

- ¹⁾ 自らの痛みを描いた代表的な画家としてフリーダ・カーロ (Frida Kahlo, 1907-1954) を挙げる事ができる。
- ²⁾ Scarry, E., 1985, *The Body in Pain: The Making and Unmaking of the World*. Oxford: Oxford University Press. を指す。スキヤリーの議論は、痛みがもつ生成と非生成のメカニズムを論じるものであり、その主旨とファーガソンの痛みには相違もある。ここでは、ファーガソンの痛みに沿ってスキヤリーに言及していることを断っておく。
- ³⁾ ファーガソンは、痛みを神経の経験を通して言語化すると同時に視覚化することを目指してきた [Ferguson unpublished : 140]。彼女にとって痛みを視覚化することは、スキヤリーが示唆するように、痛みがもたらす世界の崩壊をくい止めようとする行為である。例えば以下のような記述がある。「スキヤリーは痛みが世界をどのように崩壊させようとするのか、私たちが制作したり創造したりすることによってどのようにそれを防いでいるのかについて語っている。[中略] この文脈において、私のブラシ、鉛筆、クレヨンは私の手の延長として見なされうるし、文字通り、私の芸術創造は、私の身体に声を与え、身体を世界に広げる手段として考えることができるだろう。」 [ibid. : 221]
- ⁴⁾ 別のところでファーガソンは、「痛みはコミュニケーションのためのメカニズムである」と述べている [Ferguson unpublished : 230]。
- ⁵⁾ 1960-70年代のボディ・アーティストたちの試みや、痛みのボディ・ポリティクスの側面については [Kuppers, 2007 : 74-94] を参照。なお、本稿で引用した communicative の訳語については、筑波大学の山口恵里子先生にご教示いただき、本稿でも使用させていただいた。アーサー・フランクの communicative body の訳語も同様である。
- ⁶⁾ キュップースにとって痛みはパフォーマンスの場の中心として捉えられるものであり、その現象学的経験にとって重要なものである。そのことをキュップースはイギリスのダンスを事例に挙げて分析している [Kuppers 2005 : 80-82]。
- ⁷⁾ デイス = アピアランスは、「体感、健康、恒常性、生命機能、情動、運動性、知覚における攪乱の結果として身体が現前する」など、身体が不随意に主題化される様態を示すものであるが、ここでは痛みに限定して論じることにする。
- ⁸⁾ リーダーの説明をここでさらに引用すれば、「身体は、痛みや病気の時のように、それが通常な、あるいは望まれた状態から離れたときに出現する。身体はその時『私』から離れて隔たったものとして経験されるであろう」 [ibid. : 90-91]。
- ⁹⁾ ここで自らの身体、とりわけデイス = アピアランスへのパースペクティヴの対照的なものとしてリーダーが引用しているのは、プラトンの『パイドン』の対話 (クリトンにどのように埋葬されたいのかと尋ねられた時のソクラテスの応答) とデカルト『省察』(デカ

ルトが「私」と死体との関係について述べている箇所)である。リーダーは、デカルト的心身二元論、つまりこのように三人称として捉えられる身体のパースペクティヴが「根本的に近代の身体理解に影響し、身体化に接近する別の方法とはうまく共存せず、場合によっては別の方法にとってかわってしまった」[Leder 1990:146]と述べて、近代医療について論じているが、ここではパースペクティヴの違いにのみ焦点を当てていることを断っておく。

¹⁰⁾ ファーガソンの自己 - 他者関係を考察する上で決定的に重要であるのが、痛みと恋人であると考えられる。恋人同士の自他の融合と同じ状況を痛みの経験に見出し、痛みに想像上の人格を与えている。ファーガソンが痛みを恋人に置き換えるのは、官能的であることが自己と他者、痛みと悦びの癒合的な場であり、「意識を強いる感覚的強度」であり、ファーガソン自身を「内的身体の高まる意識へと開く」ところに、身体が包摂する自己 - 他者関係の共通性と親密さを見出しているからである [ibid.:132,148]。

¹¹⁾ ファーガソンの以下の記述を参照。「それゆえ、私はこの痛みという人格を想像した。私の一部であるが、私ではない存在・・・私を（医師たちがそうしたように）同情と愛情をもって傷つけなければならなかった—痛みと喜びが交じり合う官能的な出会いの苦しみにある恋人のような存在である。その手で私に触れ、私を抱いているこの男性的な姿は、私が自己 - 他者の繋がり多くの側面を探究するために用いた視覚的な言語の一部となった。私が繋がりをもった他者たちは恋人や医者から外側に広がり、私の作品の鑑賞者、一般の他の人々、私を取り巻く世界へと・・・あるいは内側を見て痛みへと、広がった。それはまた、私の身体が、マクロあるいはミクロレベルで、自己ではないものすべてに回答する時に常に起こっている自己 - 他者の相互作用という魅力的な世界を取り囲んでいた [Ferguson unpublished:152]。

¹²⁾ ファーガソンは、同じような経験をもつ仲間から共感を求め、またそうした仲間の共感が可能であることを次のように記している。「[他の人々と]異なっていることによって分離されていると感じる人々は、仲間の人々からの共感を最も必要としているかもしれない—でも私たちはまた彼らと共感する特別な能力をもたもっているかもしれない。痛みや病いは私たちに内側へと、自己 - 中心性へと向かわせるのだが、精神的な痛みや私的な自己の孤立感についての理解へと近づけるだろう。共感を通して、最も私的で個人的なものが、最も普遍的になり得るのである」[Ferguson unpublished:156]。

¹³⁾ リングスは「合理的共同体の下に」「合理的共同体の分身として、あるいはその影として」存在している「もう一つ別の共同体」を論じており、それは「自分が属する共同体のアイデンティティをもち、自分自身の性質を生み出す者にたいしてその人と何も共有していない人、すなわち見知らぬ人に、自分自身を曝すように求める共同体〔性〕」であると記述している [Lingis 1994 = 2006:10=27-28]。「人は他者の苦しみを知覚することはない」[ibid.:30=52]が、それを認識する「私の手、私の声、私の眼の中にある感受性」について、リングスは、次のように述べている。「この感受性は、もはや私自身の命令によって動かされるのではなく、他者の自己放棄と傷つきやすさの動きによって衝き動かされる。また、この感受性は、他者の進む道を命じたり、他者の実体を癒したりするためではなく、他者の感情を感じるために拡張される」[ibid.:31=54]。ファーガソンのいう共感、この「他者の感情を感じるために拡張される感受性」に見出されると言えよう。

¹⁴⁾ ターナーにおける身体の脆弱性の位置付けと障害学との議論については、後藤（2007）の第6章を参照。

引用文献

Beckwith, J. B., 2004, “Collecting Oneself”, *Perspectives in Biology and Medicine*, 47(2), University of Chicago Press : Chicago.

Dreger, A. D., 2004, *One of Us : Conjoined Twins and the Future of Normal*, Harvard University Press : Cambridge, MA. (= 針間克己訳, 2004, 『私たちの仲間：結合双生児と多様な身体の未来』 緑風出版)

Dreger, A. D., 2004, “Seeing Yourself”, *Perspectives in Biology and Medicine*, 47(2), University of Chicago Press : Chicago.

Ferguson, L., 2003, “Nude Body Beautiful”, *Conscience*, XXIV (1), Catholics for Choice : Washington, DC.

Ferguson, L., 2004, ““The Visible Skeleton Series” : Artist’ s Introduction”, *Perspectives in Biology and Medicine*, 47(2), University of Chicago Press : Chicago.

Ferguson, L., unpublished work in progress, *The Consciousness of the Body*, PDF version provided by the author. (<http://www.lauraferguson.net/book/>, accessed on 2010/12/15)

Frank, A. W., 1997, *The Wounded Storyteller : Body, Illness, and Ethics*, University of Chicago Press:Chicago and London. (鈴木智之訳, 2002, 『傷ついた物語の語り手: 身体・病い・倫理』 ゆみる出版)

後藤吉彦, 2007, 『身体の社会学のブレークスルー：差異の政治から普遍性の政治へ』 生活書院.

Kevles, B. H., 1997, *Naked to the Bone : Medical Imaging in the Twentieth Century*, Rutgers University Press : New Brunswick.

Kuppers, P., 2003, *Disability and Contemporary Performance : Bodies on Edge*, Routledge : New York and London.

Kuppers, P., 2007, *The Scar of Visibility : Medical Performances and Contemporary Art*, University of Minnesota Press : Minneapolis.

- Kuppers, P., 2009, "Toward a Rhizomatic Model of Disability : Poetry, Performance, and Touch", *Journal of Literary & Cultural Disability Studies*, 3(3), Liverpool University Press : Liverpool.
- Leder, D., 1990, *The Absent Body*, University of Chicago Press : Chicago.
- Lingis, A., 1994, *The Community of Those Who Have Nothing in Common*, Indiana University Press:Bloomington. (野谷啓訳, 2006, 『何も共有していない者たちの共同体』 京都 : 洛北出版)
- Polly, Jr., D. W., 2004, "Reaching Within", *Perspectives in Biology and Medicine*, 47(2), University of Chicago Press : Chicago.
- Scarry, E., 1985, *The Body in Pain : The Making and Unmaking of the World*, Oxford University Press : New York.
- Shakespeare, T., 1994, "Cultural Representations of Disabled People : Dustbins for Disavowal", *Disability & Society*, 9(3), Taylor & Francis : Abingdon, Oxfordshire.
- Smartzis, D. and P. M. Arnold, 2008, "Spine Deformity and the Artist : Laura Ferguson and the Intersection of Art and Medicine", *The Spine Journal*, 8, Elsevier Science : New York.
- Turner, B. S., 2001, "The End(s) of Humanity : Vulnerability and the Metaphor of Membership", *The Hedgehog Review*, 3(2), Institute for Advanced Studies in Culture, University of Virginia : Charlottesville.